

〔研究ノート〕

『心経附註』修養論の思想史的位相とその現代的意義

李 致 億

はじめに

日本ではあまり馴染みがないかもしれないが、『心経附註』という本は韓国思想史において極めて重要な書籍の一つである。この書物は、朝鮮中期以後、韓国思想の特徴をいちばんよく表している本だと言っても過言ではない。韓国性理学の最大の特徴を挙げると、まさに「心」を非常に重視したことにあると言えるだろう。その中心にあるのがこの『心経附註』という書籍なのである。『心経附註』とは、中国明代の真徳秀（西山、一一七八―一二三五）の篇書である『心経』に、明代の儒学者である程敏政（篁墩、一四四五？―一四九九）が注釈を加えた本であるが、かつて中国ではあまり注目されなかった。そのような本が十六世紀に朝鮮に流入すると、朝鮮では性理学者の必読書となった。特に大きな役割を果たしたのが李滉（退溪、一五〇一―一五七〇）である。

李退溪はかつて「『心経』を得て、而る後始めて心学の淵源、心法の精微を知る。故に吾、平生此の書を信ずること神明の如く、此の書を敬すること嚴父の如し¹⁾」と自述したことがある。ここで言及されている『心経』と

は『心経附註』のことであり、この書が李退溪の思想に相当な影響を与えたことがわかる。李退溪は弟子らとこの書について数えきれないほどの講論や問答を行い、弟子たちもこの書を非常に重んじ深く研究し、数多くの注釈書を出すようになった。このような傾向は、退溪の学統に限らず、栗谷学派の学者らにも活発に見られ、朝鮮性理学の一つの大きな特徴として位置づけられたのである。

それでは、『心経附註』が中国ではなく韓国に根付くようになった理由は何だろうか。李退溪はなぜそれほどこの書を尊崇したのか。この書のどのような内容が李退溪をはじめとする朝鮮の儒学者たちの心を魅了したのか。これが本研究の最初の問題意識である。そのために、まず『心経附註』の修養論の特徴を要約した後、朝鮮性理学史におけるその位相を探索する。この過程を通じて、現代を生きる我々に『心経附註』がどのような意味を持つのかを連続的に考察することが本研究の二番目の目的である。

本稿では、基本的に真西山の編著作を『心経』、程篁墩のものは『心経附註』と表記するが、二つの書籍を汎称する際に『心経（附註）』という用語を使うことにする。

一、『心経附註』の修養論の特徴

『心経』と『心経附註』は心の修養に関する書籍である。過去の思想史全体を認知している現代人の観点からすれば、『心経』または『心経附註』はそれほど特別なものに思えないかもしれない。その理由は、心の修養に関連した内容は、古くは『論語』・『孟子』から見えはじめ、『大学』と『中庸』などにもそれ（心の修養）と関連した内容が相当揃っているからである。真西山の『心経』が完成した頃の南宋後期には、すでに朱子によって